

3. 「松崎山に八世紀ごろの横穴古墳」の顛末

藤田富士夫（富山市埋蔵文化財センター所長）

池多南遺跡の南東約200mの富山市山本字太平地内に通称「松崎山」がある。最高位の標高は約80mを測る。松崎山の東裾部は土取工事によって長さ100m余にわたってえぐられ赤土が露出している。

昭和46年（1971年）、この工事中に横穴古墳が発見されたと新聞で報じられた（「松崎山に八世紀ごろの横穴古墳」富山新聞7月7日）。記事では、「前庭部が破壊され、奥の部分（奥行き約四尺、幅約一・二尺、高さ一・五尺）が残っており、ここに遺体が埋葬されているものとみられる」とある。「地元民の話では横穴前庭部は奥の穴より方形で少し大きく、中央にこの大きなつぼがあったという」ともある。出土した壺は、口縁部が欠失しているが、現存の高さ32cm、胴径55cmある。器面には、平行タタキ目文をもつが生焼けで仕上がっている。それは土師器仕立ての須恵器である、と記されている。当該地は池多南遺跡とは指呼の間に位置しており、本遺跡との関係が注目される。

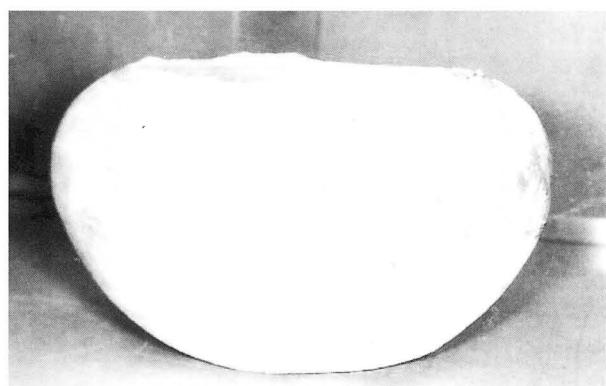
ところで「松崎山横穴古墳」について私自身いくつかの疑問を感じてきた。現地も遺物も実見していない中での感想であるが、横穴古墳の8世紀での存在そのものが疑わしい。仮に古墳時代の横穴へ8世紀の遺物が追葬によって混入したと解しても、そこは当地域で横穴が一般に形成される砂泥互層の土壤などではない。横穴古墳としては寸胴で長大過ぎる。地表面からかなり奥まった位置（写真）にあってこれまでの横穴の概念を超えている。中世のヤグラかもしれないと思案してもみたが、これも形態や規模、壁面整形が合わない。壺の出土状況が正しいとすれば未盗掘を示すこととなるが他の共伴遺物がない。これらの疑問をずっと抱いてきた。このこともあって市域で最初の『富山市遺跡地図』（1976年版）作成の事務に携わったが遺跡としての記載を留保した。

今回、池多南遺跡との関わりを考察すべく富山市教育委員会撮影の写真（=ここに掲載）について検討を行うとともに経過に詳しい富山考古学会幹事の舟崎久雄氏への聞き取りを行った。その結果、つぎのような証言をえた。それは、「新聞記事がでた後で、あの土器は自分が作ったものだと名乗り出た人がいた。記者も知っていたが訂正されないままで今に至っている。横穴も今の知識で見れば、イモ穴か土取り穴か防空壕などのようなものであった」（2005年2月14日談）といったものである。この話は、私のこれまでの疑問を解くものとなった。

池多南遺跡との関わりについては、幻となってしまったが、地元では今でも横穴の記憶が新聞に基づいて話題となることがある。しかし、横穴古墳も土器も“出土自体も”事実ではなかった。ここに34年も前の話題ではあるが、「松崎山に八世紀ごろの横穴古墳」が誤報であったことを記して、引用などについての留意を喚起しておきたい。



横穴の位置（中央人物前）



横穴出土とされた現代焼物